

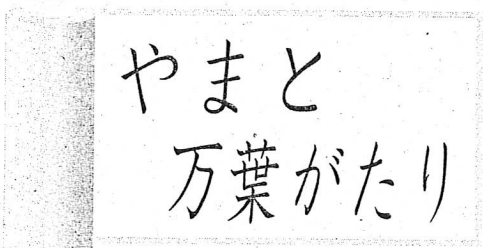
神代より 吉野の宮に あり通ひ

高知らせるは 山川をよみ

(山部赤人 巻六・一〇〇六)

私は吉野が好きで、ここ数年ずっと通い続けています。吉野の魅力は山と川の織り成す幽玄な雰囲気にあると思います。私が吉野に通う目的はもう一つあります。それは、吉野宮(離宮)の遺跡とされる宮滝遺跡の発掘調査成果を知ることです。先月も、宮滝遺跡の発掘調査により、古代の吉野宮の中心部が明らかになったというニュースが大きく報じられました。私と同じように、宮滝に通い続けている古代史ファンも多いことと思います。

この歌は、736(天平8)年6月に聖武天皇が芳野(吉野)行幸をした際、山部(辺)赤人が詠んだ長歌に付された反歌です。長歌では、天皇が治める吉野宮の周囲にある雄大な山と清らかな川の神々しさをたたえ、この



山と川がなくなるなら、その時にこそ吉野宮の地もなくなるのだらうと歌われています。そして反歌では、神話の時代から天皇が吉野宮に通い続けているのは山や川が素晴らしいからだと歌い添えます。吉野の山と川がなくなる時にこそ宮も消えうせるだらう、という長歌の結びは、

吉野の山と川が消えるはずはない、永遠のものだ、だからこそ神話の時代から天皇が通う吉野宮も、ひいては天皇の治世も永遠なのだ、という思いから詠まれたのでしょうか。さて、このような歌の情景は、宮滝遺跡の発掘調査成果によって具体的想像できるようになってきました。吉野宮は、吉野川の川岸近くに宮と称するにふさわしい構造や規模をもって建てられていたのです。赤人がこの歌を詠んだ頃には、芳野監という吉野宮を管理する機関もありました。国家として吉野宮の維持に意を用いていたことがわかります。整然と立ち並ぶ宮の殿舎、宮から見える雄大な山々、間近に聞こえてくる川の音……。そうした吉野の情景を想像すると、吉野や吉野宮をたたえる歌がたどきと納得がいくように思えます。

泉立万葉文化館主任研究員・吉原啓
次回回は9月4日

【訳】神代の昔から、大君が吉野の宮に通いつづけ、高々と支配なさるの山や川がすぐれているからだ。